

「私の戦争体験談」

小山 賢さん(昭和13年生まれ)

当時は7歳くらいだったと思う。

家の周りには畑や林が広がっていた。

昭和19年に父が招集で戦争に行ったので、祖父母と母と家の裏に防空壕を掘った。

東京大空襲の時は、夜、東の空が真っ赤だった。次の日の朝、学校に行くときには、東の空が真っ黒で入道雲のような煙がすごかったのを憶えている。

中島飛行場(中島航空金属田無製造所)上空に戦闘機が来て爆撃をすると、黒い煙が上がっていた。また、お隣の清瀬市には病院が沢山あるため、病院が狙われたようだ。

夜になると、裸電球に黒い布を巻いて、灯が外に漏れないようにした。そして空襲警報を聞くと、裏に掘った防空壕に逃げ込んだ。爆弾の「ガーッ」というすごい音して、母が覆いかぶさってくれた。直撃したら終わりだな。早く戦争が終わってほしいと恐怖を感じた。幸い自宅や近所には爆弾は落ちなかったが、一番近い爆弾は家から100メートル先に落ちた。

食事は粗末なものだった。基本的には麦飯にさつまいもを混ぜたものを食べていた。水は昭和27年までは野火止用水を利用していたが、昭和27年に井戸を掘ってからは、井戸を利用していた。

終戦後も質素な生活が続いた。自宅の近くに残飯を集めるところがあり、ブタを飼っている人がブタのエサ用に残飯を持って行ったりしていたので、夏場は臭いが酷かった。そして主に食料を求めて、多くの人々が買い出しに来た。中には着物を持って来て食べ物と交換してほしいという人もいた。また、医者が少なく、戦争から戻って来た父はマラリアに感染していたが、結局治らず寝たきりになった。

山へ遊びに行くと、爆弾の跡の穴がたくさんあり、不発弾がたくさん落ちていた。B29はかなり大きかったんだと思う。

その後父から、22隻でフィリピンに向かったものの、そのうちの2隻しかたどり着けなかったことなど、戦争にまつわる話をいろいろ聞いたことを憶えている。

令和6年8月7日 取材